1 そこにはいつも，先生の本がありました

―出版を通じてのご貢献

(株)近代科学社，元 bit 誌編集長
小山 透

1988 年夏のプロシン「卓上出版」

すでに，20 年以上前のことになってしまいましたが，情報処理学会「夏のプログラミング・シンポジウム」のテーマに“卓上出版”が掲げられたことがあります．箱根・強羅の静雲荘において，1988 年 7 月 21 ～ 23 日に開催されました．その代表を務められたのが石田晴久先生です（この「卓上出版」という名称は DTP（DeskTop Publishing）の対訳で，石田先生が提案されたものでした）．私もそのお手伝いをさせていただきましたが，大学・学術関係者以外に，ソフトウェア，フォント，プリンタ，出版など関連業界からの人々も含め，総計 67 名の参加がありました [1]．

このテーマは通常とは一風変わったものでしたが，その時期としてプロシンで取り上げられる必然性があったと思います．当時は，グーテンベルグに始まり，500 年以上にわたって基本的な技術革新がないままであった活字組版–凸版印刷が主に業態の事情から行き詰まり，当の業界にとって深刻な状況を呈してきた頃に符合します．その少し前から，出版–印刷業界では活字組版から電算写植による CTS（Computerized Typesetting System）へ（また，凸版印刷からオフセット印刷へと）代替えがなされ始めてはいました．しかし，活字組版の伝統は伊達ではなく，簡単には移行が進みませんでした．D. E. Knuth が CTS 技術のあまりの未熟さに呆れ，自著のために TeX の開発に走ったことはよく知られています（筆者も，このプロシンの数年前から troff，そして LaTeX を用いての出版物作成の試みを開始し，現在に至っています [2]）．

一方，ほとんど期を同じくして，急速に普及し始めた PC や WS のアップル Macintosh，日本電気 PC-9800，ソニー NEWS などを用いて組版を行う DTP が関連業界人の注目を集め出していました．

石田先生は，この状況をいち早く察知され，学会レベルでの取り組みとして「卓上出版」を取り上げられたのですが，その卓見には，ただただ敬意を表するばかりです．この点からも，石田先生が出版文化に対していかに深い理解を示してくださっていたのかが窺えます．

本稿では，敬愛する石田晴久先生が歩まれた人生の一部分を，出版とのかかわりを通して辿らせていただこうと思います．

コンピュータ・サイエンスの著述家として常に先陣

Web の本検索で“石田晴久”としたところ，77 件が表示されました．それらの書名から，主なキーワードを初出の年代順に拾ってみますと，表 -1 のとおりです．

ここで，それらの書籍を内容の趣旨で分類しますと，教養読み物・啓蒙書・入門書・解説書・教科書・専門書とあり，幅広い読者に向けて書き分けられていることが分かります．さらに，本のサイズである判型種別では，新書・四六・B6・A5・菊・B5 変型（アスキー判）・B5 まであります．それに応じて，多くの出版社（表 -2，総計 22 社）のイメージに合わせたものを適宜に刊行していることも目を引きます．

また，著述形態は，書き下ろし単著･共著･編著･編集･監修・翻訳・共訳・監訳，…と，これまたたいへん多彩に活躍されたことが一目瞭然です（なお，この 77 件（重複が 3 件）は書籍のみですので，雑誌など他の形式での出版物を合わせますと，軽く 100 件を超えることでしょう）．

さて，この表 -1 から読み取れることは，石田先生が常に先陣を切って，大型機からの“ダウンサイジング”の様を，そしてコンピュータの主な使途が“計算”から“情報の表現・伝達”へと変容してゆく過程を，出版を通して紹介し続けてきてくださったことです．

本小特集は，石田先生のご功績について，'90 年代から現代にスポットを当てるという趣旨です．しかし，こう見てみますと，出版の観点からは，それ以前の '70 年

1960 年代：	電子計算機('69)・人工知能('69)
1970 年代：	インダストリアルダイナミックス('71)・ミニコン('71)・画像処理（'71)・信号処理（'72)・超大型コンピュータ（'75)・マイクロコンピュータ（'75)・マイクロコンピュータプログラミング（'78)・PL/M マイクロコンピュータ('79)
1980 年代：	C（'81)・マイクロプロセッサ('82)・BASIC（'82)・UNIX（'83)・Fortran77（'85)・ワープロ('85)・日本語処理（'85)・コンカレント CP/M（'86)・パソコン（'88)・ソフトウェア（'88)・MS-DOS（'88)・OS（'89)・vi（'89)・ANSI-C（'89)
1990 年代：	OS/2（'90)・情報科学('90)・ネットワーク('91)・X ウィンドウ（'93)・スーパーパソコン（'94)・インターネット('94)・パソコン('96)・WWW（'96)・イントラネット('97)・Windows 98（'98)
2000 年代：	情報リテラシー（'01)・ブロードバンド（'02)・セキュリティ（'02)・ロボット('05)・クラウド('09)・グーグル('09)

表 -1　石田先生の著書名から拾った，年代順キーワード

IE インスティテュート，IDG ジャパン，アスキー，岩波書店，インプレス，エクスメディア，旺文社，河出書房新社，紀伊国屋書店，共立出版，近代科学社，啓学出版，講談社，産業図書，産報出版，実教出版，昭晃堂，東京大学出版会，日本実業出版社，日本放送出版協会，日本評論社，丸善

表 -2　石田先生が関係された出版社一覧（五十音順）

代，'80 年代でのご活躍にも注目しなければならないことが了解していただけるものと思います．

特筆したい本

これらの中から，年代を追いながらいくつかピックアップして紹介しましょう．まず，石田先生が著述された初の本は，高橋秀俊先生との共訳の

『電子計算機と人間—人工知能の出現』（現代の科学 19，D. G. フィンク著，河出書房新社，1969 年）

だと思います．そして，

『マイクロコンピュータの使い方』（電子科学シリーズ 61，産報出版，1975 年）

が初めての書き下ろし単著のようです．本書は，今日のパソコン文化につながるダウンサイジングへの入口の扉を開けた，たいへん重要なものと言えましょう．

次に，石田先生と言えば，やはりこの訳本

『プログラミング言語 C』（共立出版，1981 年）

を挙げなければなりません．“K&R” とも呼ばれる本書は我が国初の C の本として刊行され，そして 1989 年に「ANSI 規格準拠」として第 2 版が刊行されて現在に至っています．発行元の共立出版からの連絡によりますと，これまで初版と改訂第 2 版の合計部数は約 47 万で，累計が 50 万部となるのもそう遠くはないそうです．理工学系学術出版では，初版部数は 1000 ～ 1500，重版も通常は 500 ～ 1000 が相場ですので，この部数がいかに記録的・天文学的なものか，お分かりいただけると思います．

C が出てくれば，次は

『UNIX』（共立出版，1983 年）

ですね．これも石田先生が日本で初めて UNIX を紹介したものでした（その内容は『bit』'81 年 10 月号～ '83 年 3 月号まで 18 回にわたる連載を基にしています）．UNIX ではさらに，情報処理学会編「情報フロンティアシリーズ」の第 1 巻として刊行された

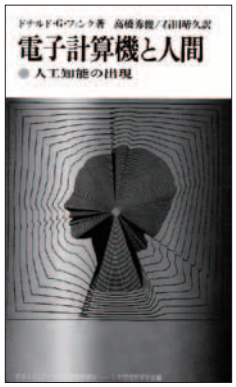
『UNIX 最前線』（共立出版，1993 年）

があります．

以上のものは皆，いわゆる「専門書」ですが，'80 年代後半からは，より多くの読者に向けた「一般書」の出版にも精力的に取り組まれました．中でも，岩波新書として，

『パソコン入門』（1988）
『コンピュータ・ネットワーク』（1991）
『パソコン自由自在』（1997）
『インターネット自由自在』（1998）
『新パソコン入門』（2000）

と，相次いで執筆され，パーソナルコンピュータとインターネットが爆発的に普及しだしてインフラとなりつつあった社会への対応をなされました．そして 2000 年代に入ると，ついに “ 生活必需品 ” となったインターネッ



電子計算機と人間

マイクロコンピュータの使い方

プログラミング言語 C（1981 年）

プログラミング言語 C（1989 年）

UNIX

トの影の部分にスポットを当て，セキュリティや倫理面で警鐘を鳴らす

『インターネット安全活用術』（2004）

を，やはり岩波新書として出版されています．

ありがたい著者

これまで私は，数え切れないくらい石田先生に執筆依頼をしてきました：雑誌の例月号や別冊，それも単発記事だけでなく，連載記事，巻頭言，コラムなど，そして書籍，シリーズ／講座モノの編集／監修／監訳などに伴う序文，…と多種多様です（じつは，今となっては叶うことのない新企画の書籍も数点ありました）．

そのわけは明白でして，先生は，編集者にとって模範的な，ありがたい著者だったからです．つまり，

- 著述内容は依頼趣旨に的確；
- 読者対象が明確で，記述中にブレがない；
- 文章は語りかけるような親しみに満ち，読みやすくて分かりやすい；
- 構成にはさりげないストーリー性があり，知らず知らずに引き込まれる；
- 脱稿期限を守ってくださる；
- 分量に過不足がない，

といった具合です．

石田先生がお書きになる文書類は，多くの読者に知らせたい（知ってほしい）という「情熱」が率直に強く伝わってくるものでした．私は，これまでの長い編集者生活の中で，いろいろな方々から数多くの御原稿を頂戴し，役得として第1番にそれらを読ませていただいてきましたが，その中でも石田先生は，ありがたい特別な著者であったのです．

『bit』とのかかわり

私が『bit』（共立出版で1969年3月号創刊，2001年4月号をもって休刊した，コンピュータ・サイエンスを総合的に扱った月刊誌）の編集長に着任したのは1986年4月のことで，その初仕事は，石田晴久先生に編者をお願いした，bit 1986年7月号臨時増刊

『コンピュータ・ネットワーク』（石田晴久・徳田雄洋・徳田英幸 編）

を仕上げることでした．

それまで『bit』の編集方針では，扱うテーマとして「言語」「処理系」「アルゴリズム」「アプリケーション」が挙げられていましたが，私はさらにもう1つ何か，インパクトのあるテーマを探しているところでした．私は思い当たる所を走り回り，相談を持ちかけました——異口同音の答えは単純明解で，“ネットワーク!!”．

そして，今では「日本のインターネットの父」と称される石田先生に，その臨時増刊号の編者代表をお願いしたのは，ごく自然なことでした．先生は，まず始めにキーパーソンとして，当時は東工大・総合情報処理センターにおられた村井純先生にアドバイス・執筆をお願いするように，とご指示くださいました．それは1984年のことで，ちょうどJUNETがスタートして間もない頃に合致しています（その後のWIDEプロジェクトは1988年にスタートしました）．1年有余を経て，本臨時増刊号は，コンピュータ・ネットワークを総合的に扱った初の事典として発行に至りました．

この頃は，IBMを代表とする大型コンピュータ（メインフレーム）の時代から，DECらのミニコンに移行し，MulticsからUNIX & Cへと，そしてさらにはマイクロプロセッサという小ちゃな怪物が登場し，それによるダウンサイジングの流れが，まさに津波のように押し寄せてきた時代でした．

また，同時期の1984～85年には，渕一博先生が先導されたICOT「第五世代コンピュータ・プロジェクト」やIPA「シグマプロジェクト」，坂村健先生が主宰する「TRONプロジェクト」，また海外ではR. Stallman氏を中心とするGNUプロジェクト・FSF（Free Software

パソコン入門

コンピュータ・ネットワーク

インターネット安全活用術

コンピュータ・ネットワーク（bit 臨時増刊）

コンピュータの名著・古典100冊

Foundation)が話題となっていました．

したがいまして，“コンピュータ・サイエンス誌”を標榜する『bit』としては，取り上げるテーマには事欠かない，まことに結構な面白い時代でありました．そのような状況の中で，『bit』の記事にふさわしいテーマを探す上で頻繁に相談に乗っていただいたのが，誰あろう石田先生だったのです．実際，先生には1992年4月から1996年2月までの4年間ほど，同誌の編集委員をお務めいただきました．

編集者としても辣腕

上記のように，『bit』を通じて，執筆者としてだけでなく編集者(委員)としてもスーパーマンぶりを発揮してくださった石田先生は，他のいくつかの著名なコンピュータ誌の編集あるいはアドバイザーとしてもかかわられたようです：『UNIXマガジン』『Cマガジン』『インターネットマガジン』等など．

さらには，書籍のシリーズ／講座，情報系の辞典・事典・ハンドブックなどの編集委員も数多く務められています．

これらの活動をハイレベルでこなすためには，

- 高い見識
- 豊かで深い学識
- 幅広い人脈
- 適確な管理・統率力

などが不可欠なものと思いますが，電通大，東大時代，またその後の慶大，多摩美大，サイバー大での教育・研究活動，ならびに数社にのぼる会社役員の要職，さらには情報処理学会をはじめインターネット協会，ネットワーク協議会など主要な学会・協会の重要ポストを歴任されたこと，そして何よりも，先生のお人柄がその礎となっていると思います．

1997年の夏頃のことでしたが，石田先生からお呼びがかかり，新宿のとあるお寿司屋さんでお会いしたことがありました．お話しは，情報処理学会が発行する『情報処理』誌の編集長を引き受けることになったので，知恵を貸してほしい，とのこと．その折は，

- 雑誌の構成：ストーリー性とバラエティ性
- bitやCACMとの比較
- 誌面デザイン：ビジュアル性と品性
- 文章論：分かりやすさと読みやすさ，品位
- 文章中の記号の使用法

その他諸々について，数時間にわたって議論したように記憶しています．そして，その後に編集長に就任されて『情報処理』誌の大改革に着手されました(在任期間は1997年10月～2002年3月，ご担当号は第39巻4号(1998年4月号)～第43巻3号(2002年3月号))．

本が好き，人が好き

インプレス社から2003年11月に発行された

『コンピュータの名著・古典100冊』

の存在が，石田先生の「本」に対する思いを端的に表していると言えましょう．ここには，石田委員長をはじめ，名だたる「本博士」の先生方(青山幹雄・安達淳・塩田紳二・山田伸一郎の4氏)から構成された審査委員会「コンピュータ名著読書推進委員会」の厳しく鋭い御眼鏡に適った100(＋α)冊が取り上げられています．その巻末には「座談会」が収録されており，選考現場での写真が掲載されていますが，ことに石田先生の，屈託のない満面の笑顔が印象的です．本に対する深い愛情が端的に現れています(その3年後の2006年9月には本書の改訂新版も刊行されました)．書くことと読ませることが本当にお好きだったことが，如実に伝わってきます．

また，私には，石田先生に紹介されて知り合いとなり，今も共に(広義の)出版活動をしている「同志」がたくさんおります．今年5月21日に東京プリンスホテルで行われる(本号が発行される時点では終わっている)「石田先生 お別れの会」に向けての準備を進める中で，このことをあらためて思う次第です．

先生は，人との新しい出会いをさりげなく演出してくださいました．広い学術分野の研究者や教育者の皆様はもちろんですが，いくつかの学会・協会の関係者，コンピュータ業界の方々，印刷関連業界の人々，テクニカルライター，サイエンスライター，デザイナー，同じ出版の世界で働く仲間たち等など，石田先生を介して多くの人々と知り合うことができたのです．これは，何にも替えがたい私(たち)の宝物です．

おわりに，以上に整理を試みた，出版を通じての石田先生の思想・理念・信条をより多くの方々が受け継がれ，またそれが永く継承されてゆくことを願ってやみません．

参考文献

1) 小山　透：印刷／出版界における卓上出版技術の影響，『卓上出版シンポジウム報告集』，情報処理学会，pp.247-251 (1989).
2) 小山　透：TeXによる学術専門書作り，数学通信，Vol.11, No.1, pp.62-73，日本数学会 (2006).

(平成21年5月11日受付)

小山　透　koyama-t@kindaikagaku.co.jp

1948年11月生まれ．1971年東京理科大学理工学部数学科卒業．同年，共立出版（株）に入社，主に数学・情報科学専門書の企画・編集に従事．2008年同社を退社．その間，1981～93年『bit』編集部勤務．2008年よりインプレスグループ・（株）近代科学社に移籍，同社取締役編集部長．